



施工
レポート

伝統の左官技術を活かして施主の想いを形に

左官施工：左官吉田 代表 吉田 一正

はじめに

愛知県犬山市の博物館・明治村には文豪の夏目漱石と森鷗外が借家した和風住宅が移築されています。今回の施工物件は茨城県つくば市の邸宅で、この森鷗外・夏目漱石住宅をイメージした25坪平屋建ての物件です。現在、左官工事は小舞掻きから荒壁までが進んでいます。

施工について

①小舞を掻く

今回の物件では、外壁と間仕切りに小舞を掻いています。平屋建てですが壁の高さは3m以上あるため真物の小舞竹では長さが足りず、軒の部分で小舞竹を上下からランコで留め付けます。このとき軒の部分で継ぐ小舞竹と通す小舞竹とで交互に互い違いになるよう留め付けていきます。

小舞竹の掻き付けには小舞縄を使用し、横竹から掻き付けていきます。横竹も末と元、元と末と交互にランコで留め付け、間渡し竹は末を上にして掻くことで、荒壁土を塗りつけた時に下がりづらくなります。また、横竹は内法

より5分の隙間をもうけることで、地震などで揺れた際に柱と小舞とが接触することを防ぎ、揺れを吸収して割れたチリぎわを補修するだけで済みます。

昔は間渡し竹と軸組の隙間を狭くしろと言われましたが（昔は5分かつ6分くらい）、耐震性を考えて貫が一寸厚となっているため、土が裏へよくまわるように間渡し竹と軸組の間に1寸程度の穴ができるように工夫します。

縦竹については末と元を逆さに掻きます。これは地面からの水分を吸い上げないため、荒壁土の重さで縦竹が下がってくることを防ぐためです。縦竹も土台から5分離し、その隙間に土を突っ込みます。土台に付いていると、荒壁土が下がってきた時に膨らんでしまうためです。

小舞縄については、横竹は千鳥掻き、縦竹は螺旋巻きで掻き付けていきますが、間渡し竹との交点はタスキ掻きにします。また、小舞縄は摩擦で締めていくもので、決して結びません。これは縄の継ぎ目でも同様で、結んで団子にしてしまうと後の中塗りの工程にまで影響が出るからです。

②丸窓(下地窓)

森鷗外・夏目漱石住宅をモデルにしているものの、数寄